特集

蝋燭（ろうそく）は消える前にひときわ輝く
～エルガーの交響曲第3番をめぐって～

等松春夫

他者との邂逅（かいこう）は、ときに芸術家に作品を生み出させる。第1次世界大戦の惨禍と愛妻アリスの死に衝撃を受け、生涯の最後の10余年は筆を折ってしまったとみられがちなエルガーであるが、実は世を去る直前の2年間は創作意欲が激しく渦巻いていた。未完に終わったとはいえ、交響曲第3番がそのことを証明している。この作品にはいかなる人々との交流があったのであろうか。

最後のファン ～アラビアのロレンス～

「……夜はレコードを聴くことがあります。最後にかけるのは貴方の交響曲第2番です。その後は何も聴く気持ちになれません。（中略）ところで、先年お目にかからせていただいた折、話題になった新しい交響曲はどうなっているのでしょうか。完成が待ち望まれてなりません。」　（大意、1933年12月22日）

この手紙の受け手はエドワード・エルガー（1857～1934）、書き手はトマス・エドワード・ロレンス（1888～1935）。第1次世界大戦中に英軍の情報将校として中東における神出鬼没のゲリラ戦でトルコ軍を苦しめ、国民的英雄となった、あの「アラビアのロレンス」である。しかし、中東にアラブ民族国家を建設するという大義は、大戦後にイギリスとフランスの帝国主義に反故（ほご）にされてしまった。自国への幻滅とアラブ人たちを裏切った罪の意識に苛まれたロレンスは戦後に公的な場から退き、著作活動の傍ら偽名を用いて戦車隊や航空隊に一兵卒として入隊する。この手紙を書いた頃、空軍を退役したロレンスはイングランド南西部ドーセット州の僻地（へきち）にある簡素な山小屋クラウズ・ヒルで隠者のような日々を過ごしていたが、陋屋（ろうおく）には不釣り合いな立派なレコード・ライブラリーがあった。ロレンスが夜な夜な耳を傾けていた交響曲第2番とは、エルガーがロンドン交響楽団を指揮して1927年に録音したSPレコードである。

第1次世界大戦中のT.E.ロレンス（1917年）
イギリス帝国戦争博物館所蔵

1908年の初演後、瞬く間に世界中のオーケストラのレパートリーに定着した交響曲第1番と異なり、1911年に初演された交響曲第2番は、なかなか世に受け入れられなかった。しかし、1920年代以降に気鋭の指揮者エイドリアン・ボールト（1889～1983）が熱心に取り上げ、ようやく評価されるようになる。懐疑と苦難から葛藤・闘争を経て肯定と勝利に至る、ベートーヴェンの交響曲の楽想を継承した第1番に比べ、懐疑と葛藤を残したまま消え入るように終わる第2番がイギリスの聴衆に受容されるには、第1次世界大戦を経て大英帝国の没落の始まりを待たねばならなかったのかもしれない。交響曲第2番はたしかに、「失意の英雄」の琴線に触れたのであった。ところで、ロレンスとエルガーの接点はどこにあったのだろうか。

エルガーとバーナード・ショー（右）

アビーロード・スタジオ前のメニューイン（左）とエルガー

マール・バンク ～1932年夏～

1920年にアリス夫人を亡くしたエルガーはロンドンを引き払い、故郷ウースター州にある古屋敷マール・バンクに隠棲（いんせい）した。王室音楽師範の形式的な公務のために時折ロンドンを訪問することはあったが、作曲家としては「過去の人」と世間では受け止められていた。実際、1919年のチェロ協奏曲以降、若干の小品とヘンデルやバッハの編曲の他には見る

べき作品が生み出されなくなっていた。

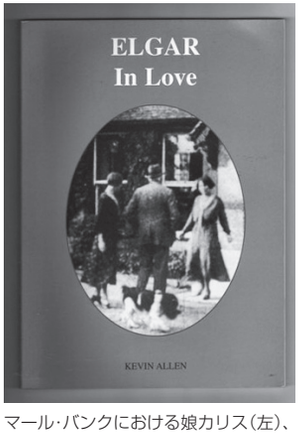
無為に日々を過ごすエルガーに変化をもたらしたのは、交友のあったジョージ・バーナード・ショー（1856〜1950）である。『ピグマリオン』（ミュージカル「マイ・フェア・レディ」の原作）や『人と超人』で知られるノーベル賞作家は、音楽批評家としても一家をなしていた。「晩年のベートーヴェンにロンドンのフィルハーモニー協会が新作を委嘱して、かの偉大な〈第九〉が生まれた」ように、エルガーに新しい交響曲を書かせるべきだ、とのショーの熱心な慫慂（しょうよう）が英国放送協会（BBC）を動かし、エルガーに新しい交響曲が委嘱されることとなる。

折からレコードの電気吹き込み技術が確立されて、エルガーは自身の指揮で自作の録音を精力的に行い始め、1932年7月にはアビーロード・スタジオでヴァイオリン協奏曲が録音された。ソリストはイェフディ・メニューイン（1916〜99）。弱冠16歳の神童は75歳の老大家と意気投合し、歴史的な名録音が誕生する。

翌8月にエルガーがマール・バンクでヴァイオリン協奏曲のテスト盤の試聴を行った際、招かれた少数の面々にはショー夫妻とともにロレンスがいた。子供のいないショー夫妻にとってロレンスは息子のような存在であり、当時ロレンスはT. E. ショーという偽名でイギリス空軍に入隊していた。このとき同席していて、エルガーとロレンスが作曲中の交響曲第3番について熱心に語り合う模様を記録した人物がいた。エルガーの最後のミューズとなった女性である。

最後のミューズ
〜ヴェラ・ホックマン〜

話は9か月遡（さかのぼ）る。〈ゲロンティアスの夢〉を指揮することとなったエルガーは1931年11月7日、ロンドン郊外のクロイドンでロンドン交響楽団とのリハーサルに臨んだ。このとき第1ヴァイオリンの2列目にいた女性奏者とエルガーの目が合った。この女性ヴァイオリニストの名はヴェラ・レベッカ・ホックマン（1896〜1963）。ラヴィ（ユダヤ教の聖職者）と離婚したユダヤ系の女性で、2人の幼な児を抱えていた。エルガーより39歳若く、際立った美貌ではないが、深みのある人柄で、オーケストラ奏者としても優秀であった。以後、エルガーが没するまでの27か月にわたり、70代の大作曲家と30代の女性ヴァイオリニストの親



マール・バンクにおける娘カリス（左）、エルガー（中央）とヴェラ・ホックマン（右）。犬はエルガーの愛犬マルコ。Kevin Allen, *Elgar in Love*（2000）の表紙

密な交流が始まる。エルガーはヴェラを「わが母、わが娘、わが恋人、わが友」と呼び、毎月7日を「出会いの記念日」と名付け寸暇を惜しんで逢瀬（おうせ）を重ねた。母親の形見であるロングフェローの詩集『ハイペリオン』を与えるほど、エルガーはヴェラに傾倒した。一方のヴェラも、たんなる敬愛の念以上の献身をエルガーに示した。ヴェラの存在を周囲の人々も公認し、1932年に撮られた写真には、マール・バンクを訪れたヴェラがエルガーと娘のカリス・エルガー・ブレイク（1890〜1970）とともに写っている。

交響曲第3番草稿の第1楽章、たおやかな第2主題の上には“V. H”と記され、エルガーは「ヴェラのテーマ」と呼んだ。新たな、そして最後のミューズがエルガーの創作意欲を掻き立て、老作曲家は交響曲の作曲に打ち込んだのである。

彼岸の交響曲

「私の交響曲第2番を愛聴してくださっているとのこと、嬉しく存じます。しかし3番が完成すれば、2番が小さく見えることでしょう。」

（大意、1933年12月28日）

冒頭に引用したロレンスからのファンレターへの返信で、エルガーは新しい交響曲への抱負をこのように述べている。事実、BBCは初演日を1934年5月に設定していた。エルガーは「作品はすでに完成している。あとは五線紙に記すだけだ」とマール・バンクをしばしば来訪し

アビーロード・スタジオにおける録音セッション中のエルガーとボールト（右）

たロンドン交響楽団のリーダー（コンサートマスター）ウィリアム・リード（1876〜1942）に語っている。リードがエルガーの没後に『わたしの知るエルガー』という評伝を著し、巻末に交響曲第3番の草稿を収録したことが、その後半世紀以上にわたり未完の交響曲を忘却から救った。リードが残した最晩年のエルガーの記録がなければ、アンソニー・ペインによる補筆も不可能であったろう。

エルガーはしかし、交響曲の完成に至らぬまま1934年2月マール・バンクで76年9か月の生涯を閉じた。その翌1935年、46歳のロレンスはオートバイ事故で死亡。「エルガーの使徒」ボールトが93年の長寿に恵まれ、ロンドン・フィルを指揮して映画「アラビアのロレンス」の音楽を担当したのは奇（く）しき縁であった。ショーは1950年、ヴェラは1963年に亡くなった。最後のミューズがエルガーから受け取った手紙は遺言により焼却され残っていない。

（とうまつ はるお・防衛大学校教授
政治外交史／英国エルガー協会会員）

12月公演の聴きどころ

渡辺 和彦
（わたなべ かずひこ・音楽評論家）

12月の読響は、《定期演奏会》（4日、サントリーホール）が常任指揮者**カンブルラン**によるメシアン（1908～92）の大作〈トゥーランガリラ交響曲〉＆読響委嘱作品の酒井健治〈ブルーコンチェルト〉。そして18日以降の《読響メトロポリタン・シリーズ》（18日、東京芸術劇場）、《特別演奏会》（19日、サントリーホール）、《東京芸術劇場マチネーシリーズ》（20日）、《サントリーホール名曲シリーズ》（22日）、《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》（23日）、《気楽にクラシック～ヨーロッパ音楽紀行～》（25日、東京オペラシティ）と《大阪定期演奏会》（26日、ザ・シンフォニーホール）が年末恒例のベートーヴェン〈第九〉公演となる。今年の〈第九〉は巨匠**レオポルト・ハーガー**（1935～）の指揮で、読響との共演は今回が初めて。なお11日に岐阜・多治見、12日福岡、13日山口・下松でも公演が予定され、そこでは**飯守泰次郎**がタクトをとる。

〈トゥーランガリラ〉は全10楽章、演奏時間75～80分の大作で、全編にピアノとともに電子楽器の一種であるオンド・マルトノが使われて超現実的な音響空間を作る。難解なメシアン作品の中では早くから人気があり、近年は東京で数年に一度くらいのペースで実演が行われ、そのつど大きな話題となる。読響もちょうど8年前の2006年12月5日の《定期》（サントリーホール）で、やはり**カンブルラン**指揮によって同曲を演奏。これはカンブルラン＆読響の初公演でもあった。この時は、オンド・マルトノの日本人スペシャリスト原田節がソロ担当（ピアノはロジェ・ムラロ）。今回は別掲のようにオンド・マルトノは**シンシア・ミラー**。これまで世界中で120回以上も〈トゥーランガリラ〉を演奏しているという。ピアノは日本でファンの多い**アンジェラ・ヒューイット**。彼女は日本ではバッハ演奏で有名だが、近現代作品のスペシャリストでもある。

〈第九〉を指揮する**ハーガー**はザルツブルク生まれ。モーツァルト演奏のスペシャリストとして有名で、ドイツ語圏の歌劇場ではモーツァルト、ワーグナーなどオペラの手堅い指揮でも高く評価されているが、ワーグナーなどでは共演者によって“爆演”を披露することも。近年すでに東京の別のオーケストラで、ハイドン〈天地創造〉を指揮。読響との共演では熱いほうの側面を見せてくれるかもしれず、大いに期待しよう。

名曲の深層

聴き慣れた名曲にも、思わぬ発見がある

第7回 ベートーヴェン／交響曲第3番〈英雄〉

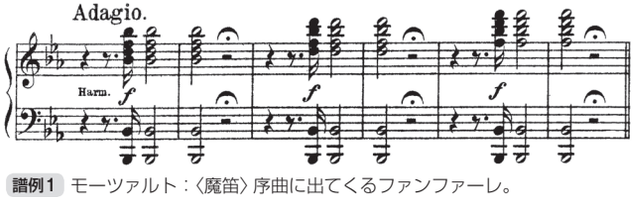
佐伯 茂樹

この連載は、読響のコンサートで取り上げるオーケストラの名曲にスポットを当て、楽譜を読み込んだりエピソードを紹介したりして作品の深層に迫っていきます。今回取り上げるのは、11月28日の《第576回サントリーホール名曲シリーズ》と29日の《第76回みなとみらいホリデー名曲シリーズ》で演奏するベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉。実は、この日に演奏される3曲にはある共通点があります。そこから〈英雄〉の深層に踏み込んでいくことにしましょう。

この日のプログラムは、モーツァルトの〈魔笛〉序曲、シューマンの交響曲第3番〈ライン〉、ベートーヴェンの交響曲第3番〈英雄〉の3曲。みなさんはこれらの共通点がおわかりになりますでしょうか？　それはずばり「3」という数字です。

〈ライン〉と〈英雄〉は、どちらも交響曲第3番ですが、〈魔笛〉はどうして「3」なのか疑問に思われる方もいらっしゃるかもしれません。実は、〈魔笛〉というオペラ（正式にはジングシュピール）は、「3」という数字とは切っても切り離すことができないのです。

モーツァルトが最晩年の1791年に作曲した〈魔笛〉は、彼が所属していた秘密結社フリーメイソンの世界と深い関係がありました。フリーメイソンでは、「3」という数字が男性会員（女性は会員にはなれなかった）を表すシンボルとして用いられており、〈魔笛〉の中でもそれを見出すことが可能なのです。フラットが3つ付く「変ホ長調」という調性、3回鳴らされるファンファーレ［譜例1］、幕開けで登場する3人の侍女、美しいハーモニーで歌う3人の童子など、枚挙に暇がありません。

ちなみに、〈ライン〉と〈英雄〉もやはり変ホ長調であり、今回のプログラムの3曲は、調性の面でも共通しています。〈ライン〉と〈英雄〉に関しては、両方とも第1楽章が3拍子で書かれている点も無視するわけにはいきません。

譜例1　モーツァルト：〈魔笛〉序曲に出てくるファンファーレ。管楽器によって3回鳴らされる。

ヨーロッパに根付く3拍子のリズムと「三位一体」

交響曲の第1楽章は、通常、2拍子や4拍子で書かれているものが多く、3拍子が採用されたこれらの曲は異例と言っていいでしょう。3拍子というと、メヌエットやワルツなど舞曲の楽章というイメージが強く、交響曲の第1楽章には相応しくないと思われているかもしれません。でも、3拍子で書かれた〈ライン〉と〈英雄〉の第1楽章は、実に力強くて堂々としていますよね。

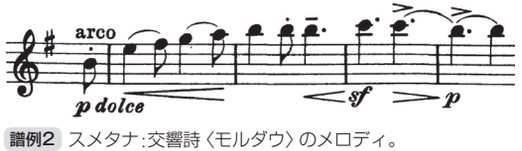
実は、伝統的な歌や踊りが圧倒的に2拍子系のものの多い日本とは違い、ヨーロッパの人々の身体の中には、3拍子のリズムが自然に流れているようなのです。これはあくまでも仮説ですが、大地に根を下ろした農耕民族は、生活のリズムが、歩行や農作業など2拍子が主体なのに対して、馬に乗って大地を駆け巡る騎馬民族は、馬のリズムや大地を蹴って跳ねる踊りなど3拍子が身近に存在したというのが背景にあるのかもしれません。

さらに、キリスト教には、「父なる神、子なる神、聖霊なる神」の「三位一体」という考え方があり、音楽の世界でも3分割を完全なものとすると考えられていました（現在、4拍子は「C」の記号で表しますが、これはアルファベットのCではなく不完全を意味していました。完全な3拍子系が「○」という記号だったのに対して、一部が欠けたものが「C」なのです）。キリスト教以外の文化でも、三界、三種の神器、御三家など「3」という数字がシンボリックに使われています。日常生活に目を転じても、三角形というのは非常に安定した形ですし、三脚などは、四脚と違って、どんなにでこぼこした地面でも安定して立てることができます。そういう意味では、「3」が完全な数字だというのは理解できますよね。

音楽史を辿ると、神を表す3拍子に対して、不完全でありながら人間的な2拍子系の音楽が次第に主流になっていったという経緯があり、バッハやベートーヴェンの時代になっても、神を表す場面では6/8拍子や12/8拍子など3拍子系のリズムが使われています。「二足歩行や四足歩行などではない」ということで、3拍子は神を表していたのでしょう。

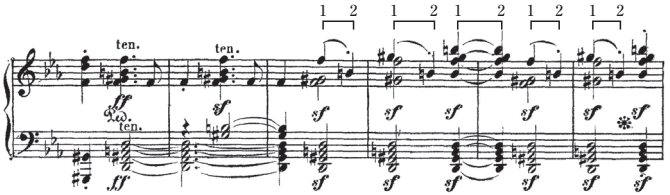
「2本の足で歩行するのではない」という意味で、3拍子系のリズムは、川の流れの表現や舟歌でも用いられています。ローレライ伝説で有名なライン川を描いた〈ライン〉の第1、第2楽章が3拍子で書かれているのも、まさしくその理由からに他なりません。ヴルタヴァ川（モルダウ川）を描いたスメタナの交響詩〈モルダウ〉の旋律［譜例2］もやはり6/8拍子で書かれていますよね。

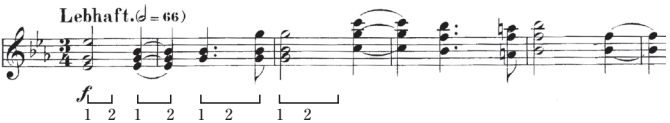
3拍子なのに2拍子のように聴こえる!?

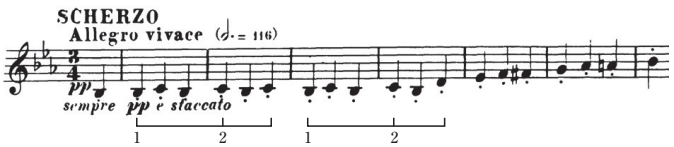
話を〈英雄〉に戻しましょう。この曲の第1楽章は、本来安定しているはずの3拍子で書かれているにもかかわらず、

譜例2　スメタナ：交響詩〈モルダウ〉のメロディ。6/8拍子で書かれている。

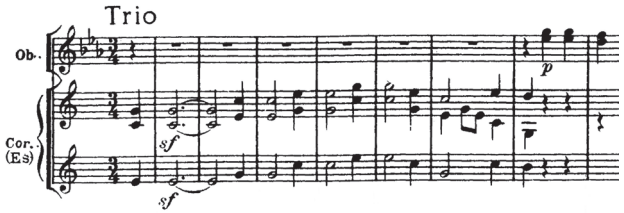
聴いているとすごくスリリングですよね。それは、展開部で、3拍子でありながら2拍子に聴こえる「ヘミオラ」という技法が使われているから［譜例3］。3拍子のリズムに耳が慣れているところに2拍子が飛び込んでくるので、その新鮮さがスパイスになるわけです。〈ライン〉も、第1楽章の冒頭からいきなりヘミオラになっていて、3拍子と2拍子が交錯する立体的な構造が聴く人の耳を引きつけます［譜例4］。もしかしたら、シューマンは、ローレライ伝説で知られるライン川の難所の複雑な流れを音で表現しようとしたのかもしれません。

3拍子なのに2拍子に聴こえると言えば、〈英雄〉の第3楽章もそうです。楽譜は3拍子ですが、冒頭のヴァイオリンの音は2つずつペアで括ると自然なので、聴いている人には3拍子にも2拍子にも聴こえるはず［譜例5］。この楽章では、中間部のトリオでホルンが活躍しますが、このホルンは3本使われています［譜例6］。当時の標準編成ではホルンは2本ですから、ベートーヴェンはここでも「3」という数字にこだわったのかもしれません。



譜例3 ベートーヴェン：交響曲第3番〈英雄〉第1楽章より。
3拍子だが2拍子に聴こえる「ヘミオラ」で書かれている。

譜例4 シューマン：交響曲第3番〈ライン〉第1楽章冒頭。
旋律が2拍子に聴こえる「ヘミオラ」になっている。



譜例5 ベートーヴェン：交響曲第3番〈英雄〉第3楽章冒頭。
ヴァイオリンの音が2拍子に聴こえる。

譜例6 ベートーヴェン：交響曲第3番〈英雄〉第3楽章トリオ。
3本のホルンが活躍する。

考えてみれば、交響曲の第「3」番、フラット「3」つの変ホ長調の第「3」楽章「トリオ」でホルンが「3」本活躍するわけですから、この曲の「3」という数字に対するこだわりは尋常ではありません。もしかしたら何か深い意味が込められているのかもしれませんね。謎解きをするような気持ちでこの曲を鑑賞してみてはいかがでしょうか？（さえき しげき・音楽ライター／古楽器奏者）